



平成28年度水稻生育診断予測事業速報No. 1

(早植栽培 5月25日調査結果)

平成28年5月30日

栃木県農政部経営技術課

 **茎数はやや少ない。充実した茎を確保するため、平年並（6月第2半旬）に間断かん水に入る。**
 **イネ縞葉枯病の発生量が多いと予想されているので、防除を徹底する。**

1 気象概況《4月上旬～5月中旬（宇都宮）》

平均気温は、4月上旬以降5月中旬まで平年より高く経過し、特に4月上旬及び5月上旬は平年より2.2℃高くなった。日照時間は平年比65～149%と長短の差が大きく、4月下旬から5月上旬はやや寡照気味となった。4月の降水量は平年比112%とやや多く、4月下旬の県内ダム貯水量が平年並に確保されていたことなどから、移植は平年並に行われた。

2 調査結果《早植栽培、品種：コシヒカリ》

(1) 16か所平均（表1-1～2）

ア 苗調査

苗草丈は平年比113%と高く、乾物重も重く（平年比124%）、葉齢は平年より多く（+0.3葉）、苗の生育はやや進んでいた。

イ 本田における生育調査

草丈は高く（平年比107%）、茎数はやや少ない（98%）、葉齢は多く（+0.3葉）、葉色は平年並（±0）。生育診断値（葉色×茎数）は平年よりやや小さい（96%）。

(2) 分施肥系の生育（10か所）（表1-1～2、2-1～2）

ア 草丈は26.7cmで平年比107%と高く、茎数は131本/m²で平年比96%とやや少ない。

イ 葉齢は5.6葉で平年より0.3葉多く、葉色は4.1で平年より0.1淡い。

ウ 葉色×茎数値は546で平年比92%と小さい。

エ イネミズゾウムシの発生は6か所で確認されたが、発生程度は低い。

オ 分けつ発生率は、主茎第2節分けつが2.5%（平年50.4%）、主茎第3節分けつは52.5%（平年24.8%）で、主茎第2節の分けつ発生率は平年よりも低い、主茎第3節の分けつ発生率は平年よりかなり高い。また、葉面積は0.13m²/m²で平年比122%と大きく、乾物重も11.1g/m²で平年比131%と重い。【農試調査】

(3) 全量基肥体系の生育（6か所）（表1-1~2、2-1~2）

- ア 草丈は27.6cmで平年比106%と高く、茎数は125本/m²で平年比104%とやや多い。
- イ 葉齢は5.6で平年並より0.2葉多く、葉色は4.0で平年より0.1濃い。
- ウ 葉色×茎数値は500で平年比107%と大きい。
- エ イネミズゾウムシの発生は3か所で確認され、防除未実施か所でやや発生が多いが、発生程度は全般に低い。
- オ 分げつ発生率は、主茎第2節分げつが0.0%（平年32.9%）、主茎第3節分げつは35.0%（平年24.1%）で、主茎第2節の分げつの発生はないが、主茎第3節の分げつ発生率は平年よりかなり高い。また、葉面積は0.10m²/m²で平年比112%と大きく、乾物重も9.0g/m²で平年比116%と重い。【農試調査】

3 技術対策

4月第5半旬～5月第1半旬に日照時間がやや短かったものの、育苗期間中の気温が平年よりも高く経過したことから、やや生育が進み充実した苗となった。

移植後の気温は0.2～2.3℃程度高くなり、日照時間も5月第2半旬は平年比89%であったが、5月中旬は149%と長くなった。これにより、水温・地温が上昇して順調に活着した。分げつは5月第4半旬の低温により主茎第2節分げつが抑制されたと考えられ、一部地域を除いて茎数は少なめに推移している。また、葉齢から判断すると、生育は平年より1～2日程度進んでいると推定される。

気象庁地球環境・海洋部発表（28年5月12日）の「エルニーニョ監視速報（No. 284）」では、“エルニーニョ現象は春の間に終息するとみられ、夏にはラニーニャ現象が発生する可能性が高い”と予想されている。ラニーニャ現象が発生すると、西太平洋熱帯域の海面水温が上昇、積乱雲の活動が活発となり、日本付近では、夏季は太平洋高気圧の張り出しが強くなり、夏から秋の初めにかけて、全国的に高温となる傾向がある（近年では、平成19年、22年、25年に発生）。また、同部発表（28年5月20日）の「関東甲信地方 1か月予報」（5月21日～6月20日の天候見通し）でも“気温は高く、降水量は平年並～多い、日照時間は平年並～少ない”と好天が予想されている。今後、葉色×茎数値を適正範囲に維持するために、以下の点に注意して栽培管理を行う。

(1) 水管理

目標とする茎数（穂数）360～380本/m²（目標収量540kg/10a、総粒数30千～32千粒/10a）を確保するまでは、夜間かん水、日中止水（浅水）として水温・地温の上昇を図り、分げつ発生を促進する。

目標茎数が確保でき次第、間断かん水に入る。平年の間断かん水開始時期は6月第2半旬である。

白未熟粒の発生を防止するとともに、登熟度を高めて良質米を生産するためには、適正籾数を確保することが重要である。初期の茎数が多く、過繁茂気味の生育になると籾数過剰となり、食味、品質の低下を招く恐れがある。適正籾数確保には間断かん水に入る時期が重要となるので、遅れないようにする。

(2) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

農業環境指導センターでは、「平成28年度 病害虫発生予報第2号」（平成28年5月20日発表）で、イネ縞葉枯病の発生量はやや多いと予想している。また、「植物防疫ニュース（速報No.2）」（平成28年5月27日発表）では、黄色粘着版でヒメトビウンカ成虫が例年（5月下旬）より早い5月中旬に捕獲されており、ヒメトビウンカの水田への飛び込みは早まると予想され、例年より早い防除の実施を呼びかけている。

発生の多い地域では、ウイルスを媒介するヒメトビウンカに対して有効な剤を使用して、地域ぐるみで防除（箱施用剤の使用+本田での薬剤散布）を実施する。

イ イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ

イネミズゾウムシの発生が目立つほ場（移植後2週間の水田における成虫密度が株当たり0.5頭以上が要防除水準）では、有効な薬剤により防除を行う。

多雨で湿度の高い日が続くとイネドロオイムシの幼虫発生期間が長引き、多発生になりやすいことから、今後の天候と発生状況に十分注意する。

ウ いもち病（葉いもち）

取り置き苗は、いもち病の発生源となるため、早めに処分する。

(3) 雑草防除

中期除草剤の散布は、使用時期に注意して散布する（移植後30日までのものが多いので、ラベルを十分確認）。なお、MCPB等を含む除草剤は低温、シメトリンを含む除草剤は高温で薬害が発生しやすいので注意する。

除草剤散布時の水管理は、散布直前に水深4～5cmとし、散布後7日間は落水や、かけ流しをしないよう注意する。

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>)

4～6月は「春の農作業安全確認運動」の実施期間です。

高齢農業者の事故が多発しています！以下のことを心がけましょう。

- ・こまめな休息や健康診断の受診等、疲労回復と健康管理の徹底
- ・ヘルメットや安全対策等、事故に備えた服装での作業
- ・複数人での作業を基本とし、一人での作業の場合は携帯電話を持つ

